

## 和歌山は第二のふるさと コブクロの夢が育った街



### 和歌山が 見出し育てた その歌

一九九八年。大阪・心斎橋の路上で歌っていた二人組に、和歌山の男が声をかけた。「うちの会社の展示会で歌ってくれませんか?」と。ここから、コ

ブクロと和歌山の深いつながりが始まる。この男が「コブクロ事務所」を和歌山に設立したのだ。そして、手づくり企画「三十人ライブ」も始まる。レストランで、ゲーム販売店で、リゾートスポットで…。県内各地に広がったそのライブで、二人の歌は輝きを増していく。

ある日、地元ラジオ局を二人が訪れた。ギターの弦を新しく張り替える。黒田はいった。「多くの人に聴いてもらえるのがうれしい。いい音で聴いて欲しい」と。DJの小川孝夫は振り返る。「聴いて、まず出てきたのが涙でした。歌が心に飛び込んできました」。

程なく二人はメジャーデビューを果たした。

### 毎年の 「ファンフェスタ」

和歌山が「第二のふるさと」というコブクロは、メジャーデビューの翌年から毎年和歌山市で「ファンフェスタ」を行っている。

その日の和歌山はコブクロ一色になる。JR和歌山駅を降りればまず、巨大な二人の写真がお出迎え。会場までの道にはのぼりが立ち並び、コブクロに引つけて五、二九六円のセールをする店もある。このライブに集まったファンは、和歌山市内のコブクロゆかりのスポットも訪れる。そう、デビュー前のコブクロが歌ったお店を、一つひとつ、いとおしむように…。

### PROFILE

ストリートで歌っていた小淵健太郎と黒田俊介が1998年に結成したフォーク・デュオ。2001年3月、「YELL～エール～/Bell」で待望のメジャーデビュー。昨年に出されたシングル「蕾(つぼみ)」はレコード大賞に輝き、今年の高校野球春のセンバツの入場行進曲に。

# 山の「あったか本屋さん」に行ってきました…



山の中の本屋さんには、子どもたちの元気な声が響いていた。十キ以上離れた田辺市龍神村の東小学校二、三年生の八人だ。毎年「体験学習」として図書室用の絵本を選ぶ。お気に入りの本を探す目は真剣そのものだ。「イハラ・ハートショップ」は和歌山県日高川町唯一の書店。山あいの道路からさらに横道を登った集落は、人影も少なく、「本当にここに書店があるの?」と、初めての人は不安になる。

でも、児童書は専門店並みの品揃え。手づくりの温かい空間は、全国の絵本愛好家や出版関係者から注目され、先日は木村伊兵衛写真賞受賞の写真家・編集者の都築響一さんも訪れた。五月四日には都築さんが再び訪れ、サイン会を開く予定だ。

お店を切り盛りする井原万見子さんは行動的だ。夜行バスで東京へ出かけ、絵本原画展などへの協力を出版社にお願いして回る。地域の子も達にも「ほんもの」に触れてもらう場を作るために…。

最近扱う商品が増えてきた。周辺の店が次々に閉店してしまつたため、地元の要望に応じて、日用品や食料品、野菜の種類まで…。

井原さんは「やめようかなと思うこともあるけど、楽しみにしてくれる人がいるから頑張ります」と話す。地域の文化も、生活も支える「本屋さん」なのだ。

## news on wakayama

### 「暫定税率廃止なら破滅的な影響」 県民に理解を求め。

国会で与野党が対立している道路特定財源の暫定税率の存廃問題をめぐり、和歌山県の仁坂吉伸知事は22日、「(廃止されれば)直ちに歳入欠陥となり、県の新年度予算に破滅的な影響が出る」と述べ、廃止になった場合の影響について広く県民に訴える考えを示した。

県によると、暫定税率が廃止されれば年間でそれぞれ県は約120億円、市町村は約50億円の減収になる。仁坂知事は、暫定税率の延長を前提に新年度予算案を編成しているため、「廃止になれば結果的に県の道路予算700億円のうち400億円が執行不能になる」と強調した。さらに、暫定

税率廃止によるガソリンの値下げを主張している民主党に対しては、聞かえがよい口実で政局にしているとして「卑怯というか節操がない」と手厳しく批判した。

仁坂知事は今後、県民との対話集会を開き、暫定税率問題についての理解を求め。また県や市町村などでつくる県道路協会が「地方のチャンスを奪わないで」などと訴えるチラシを約120万羽かけて50万部作製し、全戸配布する方針。県市長会と県町村長会も、各首長が住民向けの広報活動を行うという。

(1月23日・産経新聞)

#### 地元記者の視点

道路問題については、都市と地方で温度差がある。紀伊半島南部は高速道路が未整備で、経済活性化の大きな足かせ。また、津波などの大災害が発生すれば、海沿いの幹線道路が壊滅する。道路整備の必要性について、客観的な判断を基に、政策決定することが必要だろう。

### 大阪で和歌山産品をアピール 橋下徹・大阪府知事も応援

和歌山県の特産品の販路拡大のため、大阪の流通業や製造業の仕入れ担当者らと直接商談を進める「わかやま産品商談会in大阪」が、4日、大阪市内で開かれた。

昨年に続いて2回目の試みで、和歌山県と和歌山産業振興財団が主催した。県内の農水産物業や、梅加工業、梅酒販売業などの企業100社が参加。大手量販店のバイヤーや商工業者らに自社製品の特色や供給力などをアピールし、具体的な商談も行われた。

また、会場には仁坂吉伸知事のほか、大阪府知事に当選した橋下徹氏も応援に駆け付け、和歌山の特産品を強力にPRした。

和歌山産品のPRに他府県の知事

が駆けつけるのは異例のこと。これは、仁坂知事が当選直後の橋下氏を1月30日に表敬訪問し、近畿2府4県が合同で地場産業や産品の商談会などを開催することを話し合い、橋下氏の応援が実現した。

その際、仁坂知事は橋下氏の当選を祝い、「大・関西のリーダーとしての役割を担って欲しい」と激励。橋下氏は「行政経験が初めてなのでご指導下さい」と仁坂知事に協力を要請した。

さらに仁坂知事は、近畿各府県の消防学校の一元化や、各府県で意見を交わしながら共通の課題について取り組むことを提案した。

(2月4日・和歌山放送)

#### 地元記者の視点

関西の広域連携は古くて新しい課題だ。これまで、足並みの乱れが指摘されることも多かったが、仁坂知事がフットワーク良く大阪府との連携に動き、共通認識ができたことは、和歌山県だけでなく近畿各府県に大きなメリットがある。